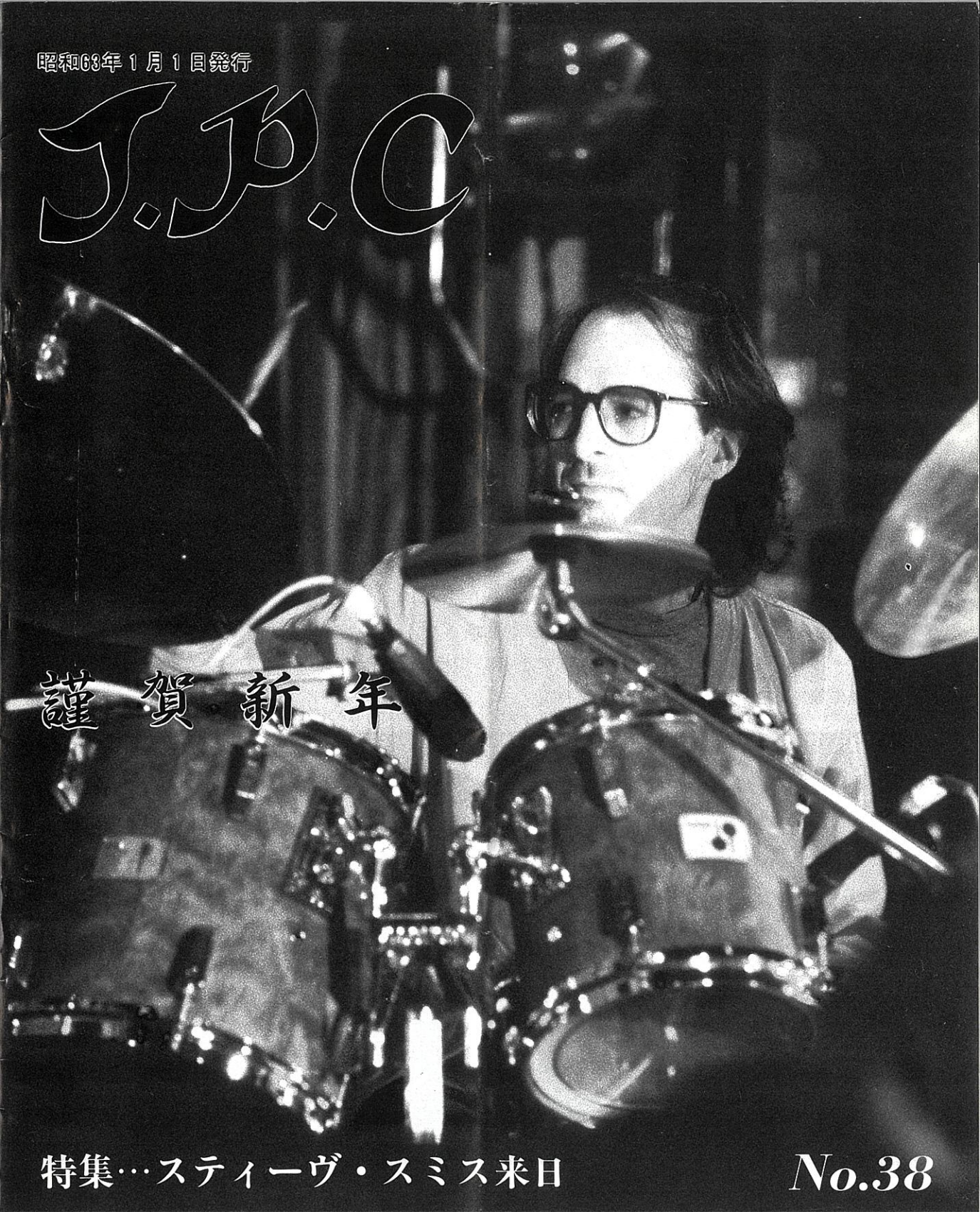
昭和63年1月1日発行

J.P.C



謹賀新年

特集…スティーヴ・スミス来日

No.38

新年のごあいさつ

株式会社コマキ楽器社長　小牧正明

希望に輝く1988年

新年明けましておめでとうございます。

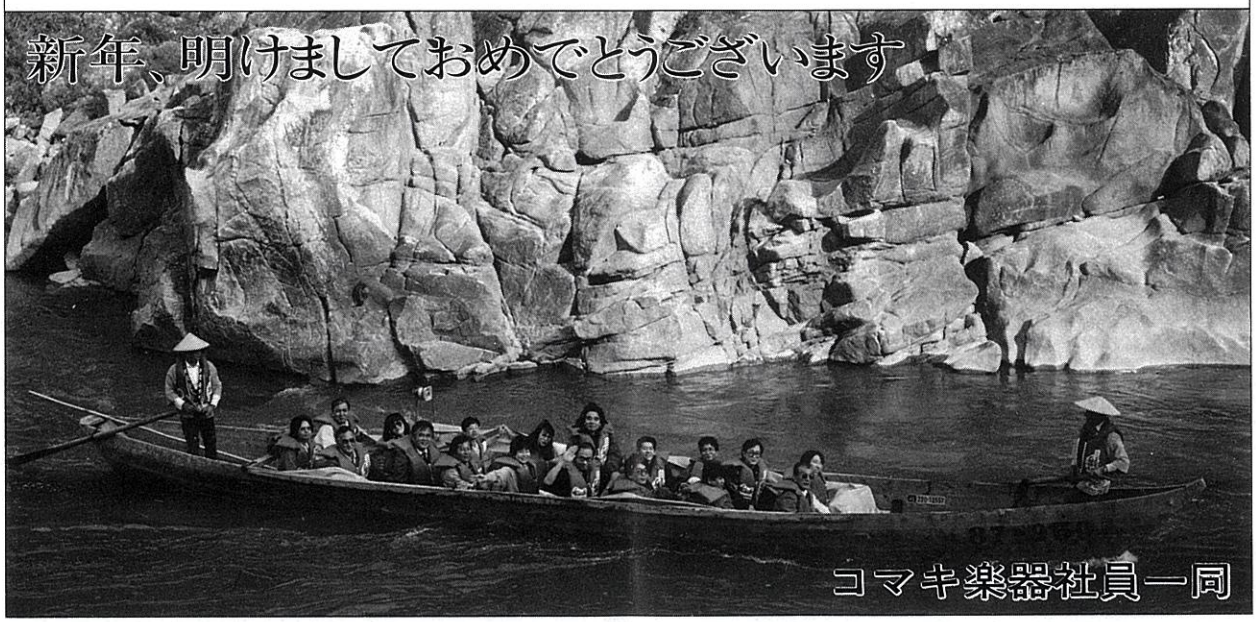
ＪＰＣ会員の皆様もすばらしい元旦をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

日頃会員の皆様の御活躍の様子を聞くにつけ、日本のパーカッション界の力強い前進の足音を感ぜずにはいられません。

ＪＰＣ会員登録数も6,000人になろうとしております。今まで地方に在住されている多くの会員の方々より御希望がよせられていながら実行出来なかった各地方でのイベントを積極的に取り上げ実行して行きたいと考えております。

幸いなことに当社発売の打楽器をお取り扱い下さるようになった楽器店が全国に大変な勢いで増加しております。又、ＪＰＣの他に日本打楽器協会、ＰＡＳジャパン等々の組織も着々と充実してまいりました。

これからは、各方面の方々の御協力を頂きながら地方会員の皆様が常に新しいパーカッションの情報とテクニックを身につける機会が少しでも多くなるよう色々な施策を打ち出して行く積りです。



岡田知之打楽器合奏団 第２回パトラス国際フェスティバルに参加

1987年８月、ギリシャのパトラスで開催された国際フェスティバルに招請された岡田知之打楽器合奏団メンバー15名と観光目的で同行した10名を含めた25名は、８月３日成田を出発。航空機事件で新聞を賑わせたバーレーン等を通過してアテネに到着。そこからさらに220kmはなれたパトラス迄、エーゲ海やコリントス湾に沿ってバス旅行を楽しみ、８月４日夕刻ギリシャ第４の都市、人口12万人のパトラスの海岸に建つクラシカルなホテルに落ちついたのである。

ホテルの前はイタリアと往き来する大型フェリーの港になっていて、翌朝からのどかな汽笛の音が目覚めの合図となり異国情緒を満喫出来ることとなった。日中は強い日差しで温度も上がるが、物影に入ると湿度がないためサラッとしてとてもしのぎやすい。朝６時頃から夜９時頃までの長い日照時間に合わせてか市民の生活も夜行型で、演奏会やイベントの開演は大体９時30分。昼間の２時から５時迄は殆んどの商店は閉店して午睡の時間となり、銀行も朝と夕方開店するといった具合。車の通行がはげしい大通りでも、道沿いのレストランが歩道や海岸ベリにパラソルを日よけにした野外レストランを設け、のんびりとカフェフラッペ（アイスコーヒー）を楽しむ様子は欧州そのもの。我々もその雰囲気を大いに味わったのであった。

約２ｔの楽器類はアテネから大型トラックに乗り換えて無事コンサート会場に到着した、との報せを受け翌朝会場の下見を兼ねて楽器のチェックに出かける。主催者からさしまわしのバスはメルセデスベンツ、車と人でごったがえす町並をすりぬけると道は山にのぼる坂となり、やがて大きな古い城壁に到着、城あとにつくられた野外ステージは背面の城壁が丁度よい反響板となり野外ステージで苦労する音のバラつきをあまり感じさせない。この日は楽器のチェックだけにとどめて午後は海水浴ときめこむことになったが、さあ出かけようという有志が出揃ったのは午後の５時頃、こんな時間では太陽が沈んでしまうのではないかと心配したが、いつまでたっても太陽は上の方にいて夜８時すぎにやっと夕方という感じで充分海水浴と日光浴が楽しめたのであった。

翌日からは本番に備えて、練習開始といっても、日中はとても仕事にならないので夕刻６時から夜の11時迄を練習時間とする。でも６～８時頃は日がカンカンと照りつけ、ステージセットは上半身裸、現地の舞台係や放送局のマイクセット担当やそのディレクターも上半身裸で作業をすすめている。照明係の中川氏は現地人に身振り手振りで指示を出し、照明器具の増設やライトの角度を変えるのに大わらわ、なにしろ野外の設備ゆえ綱一本で照明器が舞台におりてくるという、屋内のステージと異なるので一本一本のライトに鳶職よろしく鉄柱を登りおりして汗だくの仕事であった。８月９日第一日目の本番、プログラムは欧米作品の夕べ……オープニングはチャイムと瓶の音色を効果的に使ったホワイトフィールドミュージックや、タンバリントリオ、チャベツのトッカータなどオリジナルアンサンブル曲を演奏、この日の中心はこのコンサートのためにギリシャの作曲家スフェスサス氏の30分に及ぶ大曲が用意され、事前に楽譜が我々の手元に送り届けられ、練習を積んだ成果の披露であった。作曲家立ち会いの練習、GP本番は曲中に要求されている様々な仕掛けや、特殊音や、奏法も作曲者に満足感を与え完璧に理解した演奏であるとおほめの言葉をいただき、音楽親善を一つはたしたのであった。

２日目は日本人作品の夕べ。これまでに定期公演などでとりあげたレパートリーの中から広瀬量平氏の「モザイク」、水野修孝氏の「10月のエオリア」と「鼓」、平義久氏の「イエロホニエＶ」そして菅野由弘氏の「賛歌」を演奏、前日にも増して集まった観客の前で日本の打楽器アンサンブル曲の真髄を披露し喝采を受けたのであった。日本で出発の準備をしている時に、主たる打楽器類は現地で借用し、特殊なものだけ持っていけばよいのではないかと主催者と連絡をとり合ったが、パトラスの打楽器事情はあまりよくなく、殆んどなにも無いと思って全て持ってくるように、との指示に従い現地で調達したのは瓶だけという大荷物を移動させたのであった。

２回目の終演後はそれらの楽器に帰国の旅支度をさせねばならず、全てが終ったのが午前1時30分、そのあと午前２時から関係者との打ち上げをホテル近くのレストランで行ったが、その時間でもごく自然に人の動きがありレストランも営業していて深夜という感じは少なく、ただ海岸に打ち寄せる波の音が大きく聞こえていたのが印象に残っている。打楽器アンサンブルの演奏旅行というのは曲の編成にもよるが楽器の数と重量で小回りがきかず今回の目方やボリュームもＮ響が海外に移動する全体の量とあまりかわらないと楽器運搬の旅行社が感想を言っていた。当然費用も必要で、理解あるスポンサーとでもめぐり合わない限り、実現できるものではない。日本の打楽器奏者がもっと海外に出るために、公的な援助でももらえる制度があれば、日本人が持つ秀れた打楽器演奏技術を世界に知らしめることが出来るのにと、関係各位の理解がいただけることを切願する。

２回の公演を終えた一行は直ちに日本での仕事の都合で帰国する４人と別れ、トルコのイスタンブールに観光旅行、サルタンの宝物を展示してあるトプカピ宮殿やモスクの数々、アメ横もびっくりの大バザールなどを２泊３日の短時間で見物、ダラブッケだけは皆んなしっかりと買いこんだ打楽器ツアーであった。忙しい２週間であったが、有意義な時間を過した日々は様々な思い出の残る楽しいコンサートツアーであった。

岡田知之打楽器合奏団　代表　岡田知之

打楽器あれやこれや…vol.12

岡　田　知　之

NHK交響楽団打楽器奏者
国立音楽大学助教授
東京芸術大学講師

むち slapstick　whip

馬を走らせる時に用いる「むち」が発する音色を楽曲の中で模倣する際に使うもの。

馬車に使う皮製の長いむちを空中に振って、本物の音を出すのが理想的であるが、演奏しているリズムにぴたっと合わせるのは至難の業であるので、２枚の板を打ち合わせて似た音をつくり出す。この板製のむちは片手で振れるものから、板の長さが１m近い大きいものまで好みに応じて作ることが出来る。市販されているのは片手で扱える大きさのものが多い。打ち合わせる際指をつめないように注意する必要がある。管弦楽曲ではラベルの「展覧会の絵」や「ピアノ協奏曲」に効果的に用いられている。

ムリダンガ mridanga

インドの太鼓の名前、関西の言葉で「無理だよ」ということではない。

図体が大きくひざにかかえないと演奏しにくい。北インドと南インドでは形が若干異なるが、片方の鼓面は大きく低い音、一方は面が小さく高い音を出す。胴は木製や土器製で余韻の長い音はタブラに似ている。

メキシカン・ビーン Mexican bean

大型のさやえんどう豆を乾燥させて振って音を出す楽器。

渋谷のデパートのウィンドに超大型のものがかざってあるが、楽器に用いるのは長さ50～60cm位のもの。中身もカラカラに乾いているので振るとマラカスかソロバンを振った時の音に似ている。ソロバンを主体とした芸を見せていたボードビリアンを思い出す音である。

メタル・ラチエット metal Cylindrical ratchet

一般によく使うラチェット（ガラガラ）は木製か竹製であるが、金属製のものも存在する。釣用のリールのような形で音の感じも魚がかかって糸がのびていく時にリールが回る音に似ている。

メタル・ラットル metal rattle

金属製の缶の中に小石などを入れて振る金属マラカス。ショカリョという名でも使われている。

木魚 Temple block

仏教を伝える寺の必需品が、いつの頃からか打楽器の仲間入りをし、楽器メーカーによって大小様々なものが作られ、打楽器界の中で大きな顔をしている楽器。

いい音はするけれど、割れる率も高く、値段も高い。日本製の木魚は仏具店で見かけるが、立派な彫りものがあり気軽に叩くのがはばかられる風情を持っている。韓国や台湾製のものは彫刻が無いものがあり、惜しげなく叩ける感じがする。

木魚の形はしているが化学合成物質製のものや木魚は丸いものときまっていた習慣をあっさりと捨てて四角型の合板製のものも登場するようになった。

木琴 xylophone

おもちゃの木琴から音域幅の広い大型迄色々な種類があり年齢層に応じて、用途に応じて親しまれている楽器。

音板はピアノのように横に配列されているのが常識であるが、行進用ベルリラのように縦に配列され、低音を身体の方にしてタテに演奏する型もある。この縦型のものは高音の腕の届く範囲が限られるため音板を四列に並べ四列木琴といわれている。木の音板から響く木の音をだす楽器のゆえに木琴であるが、近代では木の不足から化学合成物質による代用品が生れやがてそれにとってかわる時代がくると想像される。もし新製品全盛の時がくれば「木琴」ということばは使えなくなるのであろう。

木鉦

木琴の高音や拍子木のようなカン高い音をだす木製の楽器。

元来は仏教用のものであるが邦楽や歌舞伎の下座音楽に用いられる。形は丸型で小は直径10cm位大は直径30cm位のものがある。丸型は一般的に仏具店で見受けるが角型のものも使用されている。

ライオン・ローア Lion's roar

ライオンの鳴き声に似た音を出すために考えられた楽器。

親類にサンバ演奏でおなじみのクイーカがある。作り方は簡単で、古くなったトムトムやドラムセットのベースドラムの片面をはずし、残した面のヘッドの中心に小さな穴をあけ細くて強いひもを通し、ぬけないようにひもの先に結び目をつける。ひもをつけた太鼓はスタンドに固定するか、地面に置いて足などでしっかり押え、ひもを指か湿った布で擦るとウォーという音をだす。中世の頃の文献には壺に張った皮の中央に棒をつけ擦って遊んでいる図があり、この種の楽器の歴史は古い。

ライス・ボール rice bowl

いわゆる茶わんを叩いて楽器としたもの。食卓で茶わんを叩くとうるさいと叱られるが、打楽器の分野ではそれが芸術になる。インドにはジャルタラングと呼ばれ、楽器として伝わっている。茶わんの種類は日本は得意とするところ。打楽器アンサンブル曲で茶わんを使ったものに「オスティナート・ピアニシモ」があり、以前この曲を演奏する際練習で配列した10数個の茶わんの高低をチェックしなかったため本番のステージで並べ方がわからなくなり一つ一つ叩いて音程を確認してセットしたため、楽器のセットに10分、曲の演奏は５分と演奏時間よりセットのほうが長くかかってしまったという失態を演じたこともあった。

〈そうる透・ドラムクリニック〉

Drumcity 情報

去る9月23日の秋分の日、コマキビル4Fのパーカッションスタジオに於いて、あの、そうる透氏のクリニックが開催されました。皆さんも知っての通りそうる氏は〝うるさくてごめんね〟バンド、世良公則バンド、桑田佳祐バンド等々、あちこちに出没している、今や日本では押しも押されぬ超々々人気ドラマーであります。今回のクリニックは、ナニワ楽器の協力を得て、前半にシモンズドラムクリニック、後半ソナードラムクリニックという形で行なわれました。前半のシモンズクリニックでは、SDS1000、MTX9、E-Max等々を使用したデモ演が行なわれました。デモ演終了後そうる氏から、色々な音に関する説明があったのですが、最近の技術の進歩にはただただ驚くばかりで、「こんなことまでできるのか!!」というのが正直な感想でした。特にE-Maxのスゴイこと!!

受講生の方々も、エレドラに興味はあるのだけれども、今一歩近づき難い、という人が結構いた様子で、質疑応答も、かなり熱心に行なわれていました。後半は、そうる氏がいきなり、「本当のクリニックをしたい人いる？」という大担な提言をしたところ、受講生のほとんどが、当然のように挙手、かくして、椅子をかたづけ、練習台1台を残し、皆な車座になり、受講生全員が交代で個人レッスンを受けることができるという、大変親切で、うれしいクリニックが展開されたのでした。それぞれにフォームのこと、普段の練習のこと等個人のレベルに合わせた、最適のアドバイスを受けることができました。受講生全員、約35名、やっとの思いで一巡した後、ピックアップされた数名が、ドラムセットに向いコンビネーション等のクリニックを受けました。ここでもそうる氏は、個人を大切にし、それぞれに適したパターンを瞬時に考え、それについての問題点等を、鋭く指摘していました。そうこうしているうちに、お待ちかねの、そうる氏のドラムソロ。長時間に渡るクリニックの締めくくりにふさわしい、パワフルで、エキサイティングなソロが、延々30分近くも続きました。終わると同時に会場はわれんばかりの拍手……（中にはやっと終わったと思った人もいたかも？）全く、そうる氏のあの小柄な体のどこにこんなパワーがひそんでいるのか!!ただただ頭が下がるばかりでした。とにもかくにも、熱気ムンムンのまま、クリニックは無事!!終了しました。予定終了時間を3時間以上過ぎたのですが、そんなことは感じさせない程、熱いクリニックでした。今回受講された方々は、本当に貴重な体験をしたと思います。我々スタッフもそうる氏のドラムばかりではなく、人間性の素晴らしさにも感動しました。

この次は、もっともっと強烈なクリニックになると思いますので、皆さん是非、参加して下さいね!!　(by H.Narita)

Hello! Sonor Friends 1988年 Drumcity Endorsers 使用セット紹介!

安部正隆（プレセペ）　ソナー・ローズウッド・セット（PA）
G-3018（18″×14″）、T-7022（12″×8″）、T-7023（13″×9″）、T-7034（14″×14″）、D-516PA。

石川　晶（カウント・バッファロー）ソナー・ローズウッド・セット（PA）
G-3020（20″×14″）、T-7020（10″×8″）、T-2022（12″×8″）、T-7023（13″×9″）、T-7034（14″×14″）、D-516PA。

今村公治（金山一座ロックバンド）シグネチャー・セット（EB）
HLG-22（22″×18″）、HLT-8（8″×8″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×18″）、D-505、HLD-582。

磯見　博（JAZZ）　ソナーライト・セット（MB）
LG-20（20″×16″）、LT-10（10″×19″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LT-15（15″×13″）、LD-557MB

石松　元（前田憲男ウインド・ブレーカーズ）ソナーライト・セット（MB）
LG-20（20″×16″）、LT-10（10″×9″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-15（15″×16″）、LD-547MB

岡本郭男（スタジオ・ワーク）　シグネチャー・セット（RH）
HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT12（12″×12″）、HLT-14（14″×14″）、HLFT16（16″×16″）、HLD-580RH、HLD-581EB。

奥谷　透（アンリ菅野）　ソナーライト・セット（MB）
LG-18（18″×15″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-14（14″×15″）、LD-547MB。

風間寛也（スタジオ・ワーク）　シグネチャー・セット（EB）
HLG-24（24″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLT-14（14″×14″）、HLFT16-（16″×18″）、HLD-580EB、HLD-590。

菊地丈夫（松任谷由実・スタジオ）　ソナーローズウッド・セット（PA）
G-3024（24″×14″）、T-7080（8″×8″）、T-7020（10″×8″）、T-7022（12″×8″）、T-7023（13″×9″）、T-7024（14″×10″）、T-7036（16″×16″）、D-516PA。

小沼俊明（バービー・ボーイズ）　ソナーライト・セット（MB）
LG-22（22″×17″）、LT-10（10″×9″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-16（16″×17″）、D-518CW、LD-547MB。

小山太郎（JAZZ）　ソナーロースウッド・セット（PA）
G-3018（18″×14″）、T-7022（12″×18″）、T-7023（13″×9″）、T-7034（14″×14″）、D-516PA。

坂口良治（米米クラブ）　シグネチャー・セット（RH）
HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-14（14″×14″）、HLFT-16（16″×16″）、HLD-582、HLD-580EB。

鈴木孝廣（JAZZ）　ソナーローズウッド・セット（PA）
G-3018（18″×14″）、T-7022（12″×8″）、T-7023（13″×9″）、T-7034（14″×14″）、D-516PA。

杉山章二（MOJOクラブ）　ソナーライト・セット（GL）
LG-22（22″×17″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-15（15″×16″）、LFT-16（16″×17″）、LD-557GL。

関根英雄（JAZZ）　ソナーライト・セット（PA）　シグネチャー（RH）
LG-18（18″×15″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-14（14″×15″）、LD-547PA、HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×18″）。

田中裕二（安全地帯）　シグネチャー・セット（RH）
HLG-24（24″×18″）、HLT-8（8″×8″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×16″）、HLD-582、D-505。

田中一光（小比類巻かほるバンド）　シグネチャー・セット（EB）
HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12）、HLT-14（14″×14″）、HLFT-16（16″×16″）、HLD-581EB。

土屋敏寛（セッションバンド）　シグネチャー・セット（RH）
HLD-24（24″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×16″）、HLD-580。

徳永善也（チェッカーズ）　シグネチャー・セット（EB）
HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×17″）、HLD-581EB、HLD-590。

松丸雄史（ロックバンド）　シグネチャー・セット（EB）
HLG-22（22″×18″）、HLT-10（10″×10″）、HLT-12（12″×12″）、HLT-13（13″×13″）、HLFT-16（16″×18″）、HLD-581EB。

新井田耕三（RCサクセション）　ソナーライト・セット（MB）
LG-22（22″×17″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-16（16″×17″）、LFT-18（18″×18″）、HLD-580EB。

村上　寛（ひろしバンド）　ソナーライト・セット（PA）
LG-18（18″×15″）、LT-12（12″×10″）、LT-13（13″×11″）、LFT-14（14″×15″）、LD-547MB、D-505。

渡辺　豊（西城秀樹バンド・スタジオ）　フォニックプラス（HTA）
G-22（22″×18″）、T-10（10″×10″）、T-12（12″×12″）、T-13（13″×13″）、FT-16（16″×18″）、D-518X。

※EB＝エボニー、RH＝ブビンガ、MB＝バーチ、PA＝ローズウッド、GL＝グラファイト・ラッカー、HTA＝ハイテク仕様

SPECIAL

Steve Smithがやって来た！

スティーヴ・スミスがやって来た。コマキ楽器のLove Callに応えてやって来た。東京は秋たけなわの10月。10月15日〜18日科学技術館で開催された楽器フェアのコンサート、17日、18日の新宿PIT-INNでの加古隆とのセッション、19日のクリニック、合い間を縫ってリハーサルやインタヴューが行われ、時差やハードスケジュールによる疲れにも関らずいつも笑顔のスティーヴ・スミスのコンサートやクリニックの様子を取材！

CONCERT

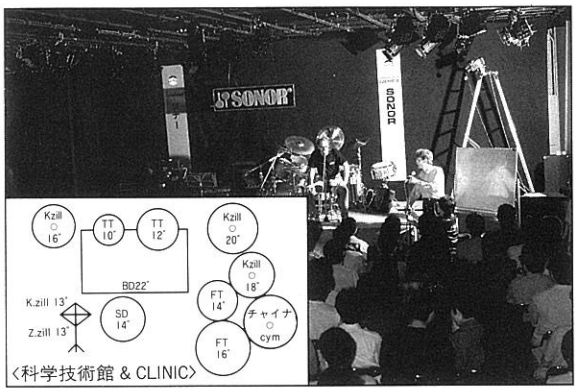
コンサート第１号は10月17日㈯の科学技術館サイエンスホールでのミニ・コンサート。天気晴天なれど大人も飛ぶ程の大強風。それでも２年に１度の楽器大見本市、ましてや、有名プレイヤーのデモ演が タダで観られるとあれば、例え台風だったとしても人出は物凄かっただろう。午後１時、カワイ楽器主催コンサートでキーボードのトム・コスターと共演。トム・コスターといえばあの「哀愁のヨーロッパ」を作曲した人物。この曲は勿論、ベースやパーカッションのテープを利用してアップビートの曲も数曲演奏した。我らがスティーヴは、シグネチャー（ＲＨ＝ブビンガ、ヘビー）を使用。ペダルはDW、シンバルは持参のKzill。さてそのプレイはというと、ビートが何と気持ち良く決まることか。体の中にスッと入ってきて体の内でズーンと広がる感じ。数年前本誌でも紹介したけれど、ミルフォード・グレイブスが「ドラムは心蔵の鼓動と血液の流れだ」と言っていたことを思い出した。２Bassは当ったら必ず命を奪われるマシンガンのように正確にきっちりと叩き込まれるし、スティックワークは叩くというより弾いている感じがする程、自由にタムやスネア、シンバルの上を動き回る。サウンドは深く幅広い。シグネチャーってこういうサウンドしてるのかと納得させられてしまう。チューニングもあるだろうけれど、どんなに大きな音を出しても耳に痛くない（モチロン、テクニックが大きなウエイトを占めてるだろうけど）。すごい汗っ掻きというのが有名だそうで、額に汗どころか、体中からパワーを吹き出していた。コンサート終了後、ソナー社の社長夫妻が「He is the greatest Drummer!」と言って拍手を惜しみなく送っていた。

午後３時からのコマキ楽器主催のコンサートも同様にトム・コスターと行なわれ、立見が出るほどだったとか。この２回のステージは楽器フェア中最高の動員数だったそうだ。

この日は非常にハードな日で、夜は新宿ＰＩＴ-ＩＮＮで加古隆（pf）、吉野弘志（ｂ）とセッション。全て加古隆のオリジナルで、スティーヴの来日数日前にテープと楽譜を宅急便で送り、前日（16日）に１度リハーサルをしたのみ。後日インタヴューで〝良い経験だった〟と語っているとおり彼にとって初めて経験するジャンルのものだったようだ。演奏された曲殆んどがフリー・ジャズというかインプロヴィゼイションが多かった。ソナーライト（MB-スカンジナビアンバーチ）を使用したスティーヴ・スミスは昼間のサイエンスホールとは打って変わってあらゆる感覚が張り詰めている感じのプレイ。ピアノとベースと音を敏感にキャッチしてドラムを叩いて行く。メロディーを完全に理解していないと出来なそうなユニゾンのフレーズがバチッと合った時、ああこの人はドラマーではなくてミュージシャンだなと思った。リハーサルの時はなかなか合わなくて苦労したそうだがサスガ本物である。

CLINIC

11月19日㈪夕方行われた「スティーヴ・スミス・ドラムクリニック」。平日にも関らず150名近い参加者で会場は熱気ムンムン。スティーヴの希望でサイエンスホールで一緒に演奏したトム・コスターとベースのグレッグ・リーも突然参加。



クリニックは先ず30分のロングソロで始まった。とどまるところを知らないような音の嵐。ソロが終って汗を拭き拭き質疑応答に入る。ハイハットのサウンドについては、ソフトに出したい時は足を少し横にずらしてペダルに乗せ、ハードにしたい時はしっかりペダルに乗せるとか、ジャスト・ビートのロックに比べジャズは気持ちがとても前ノリになるからテンポはキープされていてもビートは少し前ノリになるとか親切に答えてくれた。一貫して言っていたことは、とにかくリラックスすることが大切なんだそうだ。

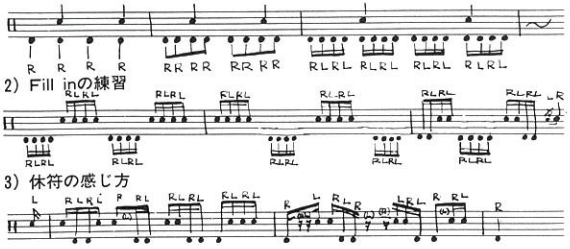
一通りの質問に答えた後、彼自身がどのような形を経て現在のプレイをするようになったかということをドラムセットの進化というか音楽史みたいなものを演奏をしながら教えてくれた。ルーディメンツ（マーチング）から始まりスウィング→ビッグバンド（管楽器セクションの進歩で左手が独立し出す）→ビーバップ（ＢＤやＳＤにソロ性が出てくる）→Ｒ＆Ｂ→ジャズ（アヴァンギャルドなジャズ）→Rock'n Rollとい

う具合に。

注目の2 Bassは自筆のプリントが各自に配られ、それをテキストに使用。どのパターンもとにかくまず遅いテンポで確実にできるようにすること。充分にできるようになったところで少しずつテンポアップしていく。

このようにしてクリニックは終り、最後にトム・コスター、グレッグ・リーとのセッションが始まり、スタンダードなジャズを数曲聴かせてくれた。会場は一転してライヴハウスとなる。

1) テンポテープのための練習



(by M. Ishii)

INTERVIEW

JPC（以下J）：生年月日はいつですか？
Steve Smith（以下S）：1954年8月21日。
J：33才ですか…。まず、ドラムを始めたきっかけは？
S：小学校4年生のとき楽器屋さんがデモンストレーション演奏を兼ねたセールスみたいなものを学校でやったんだ。その時のアンケートで友達はトランペットやクラリネットを選んで、僕はドラムを選んだのがきっかけ。ドラムのSoundに興味があったんだ。マーチングバンドなんか見るとエキサイティングしちゃってね！
J：ビル・フラナガンが最初の先生だそうだけど彼ってビッグ・バンド演ってた人でしょう？そうすると、ジャズに始まってジャーニーのロックに移って、今はまたジャズ（ステップス・アヘッド）に戻ってる。結構トータルにこなしてるなって感じるけど、どうなんだろう？
S：9才から17才までビリー（ビル・フラナガン）に教わってた。その後ボストンにあるバークリー音楽院で4年間勉強して、卒業してからジャンリュック・ポンティ（ジャズヴァイオリン）と初めてフュージョンをやった。彼はちょうどマハビッシュ・オーケストラを辞めた時だったんだ。彼のバンドに入ってみたら、音楽（ポンティの）を理解することは出来たけど、ロックに必要な強いバックグラウンドは知らなかったんだ。それで、良いフュージョン・ドラマーになる為にはジャズもロックも出来なきゃならないってことを知ったんだ。彼のバンドを抜けてから経験のためにロックを演りたいって思った。それまではね、ロックが全然ダメだったんだ。高校の時ちょっとやってた位で……。簡単なドラムパートが出来なくってがっかりしたね。いつも、昨日（11月16日）のPIT-INNのようなフリージャズとかインプロヴィゼイションばっかりやってたから……。

フュージョン・ドラマーとして考えると、例えばジャズが左の端にあるとしたなら、ロックが右の端にあって真中にフュージョンがあるって考えられる。当時、あまりにもジャズに偏っていたからもっとロックをやりたかった。そんな時、ロニー・モンテロスのところで叩き出したんだ。そしたらジャーニーが僕の演奏を気に入ってくれて入らないかって誘ってきたんだ。それが本格的にロックを始めたきっかけで、7年間ジャーニーにいたね。この7年間でロックを充分に消化した、と感じた時に、今こそジャズとロックの両端を混ぜようって思った。ステップス・アヘッドやヴァイタル・インフォメーションとかでね。クリエイティヴな音楽を演りたくなったんだ。もちろん、ヘヴィ・メタもジャズもやってるよ。ただ、もうバンドに加わろうとは思わないけどね。
J：ジャーニーとかでロックを始めた頃の事なんだけれど、ジャズに比べてロックの方が音楽的コミュニケーションが少ないと思うのね。そういった意味でロックに対して寂しいものを感じなかった？
S：確かにいえるけれど、それとは違う面で興味を持ってるんだ。何がサウンドを作っているのか、何がロックのKeyなのか…。全ての音楽には、それぞれ異なったKeyがあるよね。そのKeyは大切なもので、僕はそれを全て見つける事にチャレンジしてるんだ。

例えば、ロックには、fill-inがある。ここには特別なチャレンジが必要で、違ったコミュニケーションもある。これの入れ方ひとつで、その後の雰囲気が全然変わっちゃったり…。だから寂しいとかそういうのは無いけど。ジャーニーで7年もやったんだ。今はもっと違った経験が必要なんだよ。1つのバンドで同じミュージシャンで、同じ音楽で…これこそ悲しいことだね。
J：Keyといえば、PIT-INNでの加古隆とのセッション、あれは現代音楽っぽいジャズみたいだけれど、あの中でのKeyは何なの？
S：昨日の彼の音楽は、現代曲とジャズの中間みたいなものだけど、殆んどジャズだね。フィーリングもジャズだし、インプロヴィゼイションだし。

彼の音楽のKeyは、聞くこと、そして選ぶこと。メインになるのは聞くことのコミュニケーション。つまり、どこで音を出してどこで音を出してはいけないかを考えながら演奏すること。
J：プレイを見ていて思ったのだけれど、叩いているっていうよりは弾いている、縦というよりは横の動きっていう感じ…。特に気にしていることとかありますか？特別な練習方法とか…。
S：ドラムから音楽を作る事にトライしてるんだ。リズムだけじゃなくて音のまとまりやうねり…。例えばソロで小刻みな感じ方よりももっと大きなうねりのようなものを感じて自然にプレイするんだ。このタムの次はこっちのタムっていう風じゃなくて、メロディーからのまとまり、フレーズから自然に腕が動くようにね。

とてもゆっくり、体を使って「動き」として音を出す練習をした。〝こういう動きをしたらこことそこのタムの音が聞こえる〟っていう感じ。決してテクニカルにならないように動き、うねり、フレーズを感じて……マリンバでスケールを練習するのに似てると思うよ！
J：これからはどんな事を演っていきたい？
S：ウ――ン。もっと上手くなるようにすること。そして良いミュージシャンともっとプレイすること、経験することかな。ヴァイタル・インフォメーションとかその他のミュージシャンとの成功。例えば昨日の加古隆のような特別な演奏会っていうのも成功につながると思うよ。
J：すると、最後というか頂点には何を求めているの？
S：深い意味のあることだと思うけど、僕自身の成長。――――音楽に問題が出てきたらそれを解決しなくちゃならない。人生にもあるように、例えば、奥さんと子供がいると色々な問題が起こるでしょ！それを解決するのに色々な事を考えなくちゃいけないよね。僕の音楽は自分の学び方――――宗教と似てるよね（笑）。
J：ジャンルにとらわれずに？
S：ロックもジャズももっと上手くなりたい。音楽は常に発展、発達の可能性があるよね。僕はロックよりもジャズの方がずっと大きい部屋だって気付いた。ロックでは楽しいパーツをクリエイティヴに演奏してレコードにする。パーツを組み合わせてレコーディングするんだ。でもジャズでは毎晩音が違うってこともある。毎日毎日変化してるんだ。それがジャズであってインプロヴィゼイションであるってことなんだ。それだけに大きな部屋をかかえてるってこと。かと言ってジャズばっかりやるっていうんじゃないけどね。
J：最後にソナー・ドラムについて何かひとこと（笑）。
S：僕がソナーを使うのはとにかくSoundが好きっていうのがあるね。バーナード・パーディーがライヴで使ってた時の音を聞いてとっても良いと思ったんだ。ソナーはとても深い音が出るし、ハードウエアの作り方も気に入ってる。ハードな演奏をしてもB.D.は決して動かないし、フロア・タムの足にもクランプがあるから滑らないしね。他にも理由はいろいろあるけど決して変えようとは思わないよ。エリートっていうのか、優雅で、気品があって…ちょうど、メルセデス・ベンツのオーナーと同じ気分なんだ（笑）。

（10月19日　コマキにて by A.Komaki）

PASIC'87

Percussive Arts Society International Convention
10／28〜11／1　1987

今回で26回目を迎えたＰＡＳ（Percussive Arts Society）の年１度のビッグ・イベント〝ＰＡＳＩＣ〟。今年も例年通りの大盛況で開催された。

今回は、大きなアーチ（Gateway arch）のある町、50年代のJazzを代表する町で有名なセント・ルイスにある豪華なアダムス・マーク・ホテルが会場になり、２階と４階のフロアを使ってクリニック、ミニコンサート、楽器展示を行なった。毎日朝９時から夕方５時までみっちりクリニックや講議が行なわれ、毎晩コンサートがあり、夜中にはジャム・セッションもあって、いつものことながらいささか興奮気味の４日間だった。

Ⅰ. CLINIC

数あるクリニックの中で興味深かったのは、Emil RichardsのVib. クリニックでリズムの解釈を面白くしたアド・リブの方法をアドヴァイス。簡単にいってしまえば、ある拍子の中で、４分音符や８分音符、16分音符を拍に捕われずに細かく分けるということ。

例えば、4/4拍子が与えられているとする。この中に８分音符は８個含まれる。これを３個と２個に分けると、３＋３＋２、或いは３＋２＋３、或いは２＋３＋３となる。もう少し頭を柔らかくしてみると、８＝３＋３＋２＝５＋３＝４＋１＋３＝２＋３＋１＋３etc. etc.とどうにでも発展していく。16分音符で考えれば、4/4拍子の中にこの音符は16個も含まれているわけだからもっともっと発展して面白くなる。わりに簡単に出来るのでノーマルな拍子の中でも変拍子に聞こえるし、変拍子はより複雑になるし（といっても変拍子の時は聞く人よりプレイヤーの方が苦労するだろうけれど）、何拍何連符などという小難しいことをやらなくても結構面白い。

また、数字遊びみたいなものがあって、これも面白い。身近にころがっている数字をリズムにしてみる。電話番号が良い例で、例えば、ジャパン・パーカッション・センターの市内番号は845。８＋４＋５＝３＋２＋１＋２＋３＋１＋２＋３となる（もちろん他にも組合せはある）。こういう分析を数字を見たり聞いたりすると同時に行ってすぐリズムをたたいてみる。そうすると、アド・リブだけでなく、変拍子やフレージングにも非常に良い練習になるはず。

Steve Smithのクリニックは日本でのクリニックとほぼ同じ。使用したのはソナーのシグネチャーライト、カラーはニューカラーのインパララッカー。ペダルはDWのツイン、シンバルはK. ジルジャンとこちらは日本で使用したものと同じである。彼のアメリカでの人気は凄いもので、太鼓と関係のない人でも彼のことを知っている。昨年のSteve Gaddと同様、一番参加者の多いクリニックだった。

Ⅱ. LECTURE

講議というと堅苦しいものが多いが、William Ludwig Jr.の〝A History of Percussion〟は楽しかった。名前を見てもわかるとおり、彼は現在のラディック社社長である。家宝（？）の古めかしいパレードドラムを持ち出して、ドラムの構造、左手のグリップの変遷、スリングのかけ方の変化（昔は左肩にかけていたそうだ）など、歴史的背景と共にユーモアたっぷりの講議（80分間）だった。

Ⅲ. CONCERT & JAM SESSION

10／28　11：00AM　Opening Concert

- Plot（1967）　作曲…Herbert Brün　演奏…Allen Otte
- Snare Drum for Camus　作曲…Joseph Celli　演奏…Buffalo Perc. Ens.
- Madrigals〜　作曲…George Crumb　演奏…Michael Rosen（per.）　Marlene R. Rosen（sop.）

10／28　8：00PM　EVENING CONCERT

- QUIETE　作曲…David Macbride　演奏…Buffalo Perc. Ens.
- Dunbar's Delight（Timp Solo）　作曲…Robert Erikson　演奏…Daniel Dunbar
- Makro KosmosⅢ　演奏…Rich O'Donnell Tom Stubbs他
- Hinomi　作曲…Michael Finnissy　演奏…Jan Williams
- At Loose Ends　作曲…Herbert Brün　演奏…Perc. Group Cincinnati

（メモ）

『QUIETE』７人のためのアンサンブル。B.D.を中心に合計７台の太鼓を並べ１人１台を担当する。ちょっとギャグだが、ある人が隣人の太鼓を叩き始めると、奪われた人はまた隣りの太鼓を叩くので最後にひとりがあぶれてしまう。そこで演技が要求される。あぶれた人はどうにかして自分の太鼓を取り返すのだ。この手の曲、日本人って苦手のような気がする……。

『Makro Kosmos Ⅲ』打楽器２人、ピアノ２人。打楽器としてのピアノ、ピアノとしてのピアノ、和音としての打楽器という具合に全曲を通して非常に繊細に作られていて、まるで透きとおったガラス細工を組み上げていくような曲。

10／29　9：30AM　Panorama'87 USA

- The Hammer　作曲…David Rudder
- Confusion　作曲…Cliff Alexis
- Summer Song　作曲…Cliff Alexis
- Pan in A Minor　作曲…Lord Kitchener　演奏…Massed Steel Bands

10／29　8：00PM　Harvey Warner Solo Concert

- Within the Vortex　作曲…Frank Wiley
- Stone Fire　作曲…Larry Borden
- Cloning of H. W.　作曲…Paul Zonn
- Five Primitive Chants　作曲…William R. Hill

（メモ）

〝Massed Steel Bands〞はイリノイ大学や北イリノイ大学、アメリカン・コンセルヴァトリー・オブ・ミュージック等13大学のスチールドラム・バンドメンバーによる合同演奏会。スチールドラムの第一人者、Clifford Alexによるアレンジ曲やオリジナル曲を150人近いプレイヤーがメロウに、分厚く、エキサイティングに次々とメロディーを奏でていく様は、見る者、聞く者を決して飽きさせることがない。今、全米でスチール・ドラムが大人気。

10/30　9:00AM　The University of Utah Percussion Ensemble Concert

- Momentum　作曲…William Kraft
- Mark V Marimba Toccata　作曲…Ardean Watts
- Portico　作曲…Thomas Gauger
- West Side Story Medley　作曲…Leonard Bernstein　編曲…Rich Berry

10/30　2：00PM　State University of Sao Paulo Percussion Ensemble Concert

- 33　Samra Zabobra　作曲…Carlos Stasi
- Ritmos　作曲…Miguel Coelho
- Codex Troano　作曲…Roberto Victorio
- Music for Pans　作曲…Hermeto Pascoal
- 〝Grupo Piap〞

10／30　7：30PM　Dance＆Percussion Concert

- EQUILIBRUM
  〝Oh my Ears and Whiskers!〞
  パフォーマンス…Nancy and Michael Udow
- BURNING FEET DANCE
  Tango Freeze
  Sis.　Uh oh…　Angular Arrest
- KATHERINE DUNHAM DANCE COMPANY
  Village　Dance of the Witch Doctor
  Lamba／Lendieng　A Percussion Interlude

（メモ）

ユタ大学パーカッション・アンサンブルは、1987年のアンサンブル・コンテスト優勝グループ。演奏は、流石に素晴しいもので、特に『Mark V Marimba Toccata』は、5人のテクニックもさることながら、バランス、全体のビート感、音楽的にセンスが素晴らしく、最高のマリンバ・アンサンブルを聞けた。『ウエスト・サイド・ストーリー』はマリンバ・オーケストラスタイル。マリンバアンサンブルに打楽器を組み込んだアレンジものは、演奏上色々と難しい点が出てくるが、彼らの場合には全くそういうものを感じなかった。融け合った2つの楽器群が1つの新しい響きを生み出す。因みに、打楽器セクションは原曲とほぼ同じ、バス・マリンバはアメリカでよく見るピックアップマイク付きを使用（バピブは無い）。

10／31　9：00AM　Richardson High School Percussion Ensemble Concert

- Woven Tale　作曲…Jared Spears
- Spanish Dance（Playera）　作曲…Enrique Granados
- The Whistler　作曲…George H. Green
- Rhythmic Etude No.1　作曲…Ernest Muzquiz
- The Ragtime Robin　作曲…George H. Green
- Suite for Solo Drum Set and Percussion Ensemble　作曲…David Mancini

10／31　4：00PM　Bob Becker and Sammy Herman Concert

10／31　9：00PM　Boogsie Sharpe Experience Concert

11／1　10：00AM　Jonathan Hass Timpani Concert

- Sokol Fanfare　作曲…Leos Janacek
- Steal the Thunder　作曲…Jean Piché
- A Stopwatch and an Ordinance Map　作曲…Samuel Barber
- Conversation for Two Timpanists　作曲…John Serry
- New Work for Timpani & Marimba　作曲…Andrew Thomas
- Johnny H. and the six cents　編曲…Ian Finkle

EVERYDAY　10：30PM　Jam Session

毎晩行なわれるジャムセッションは、その日クリニックをしたドラマーのなかから時間のある人がフラリと遊びに来てプレイする。まったくのシロウト同志のセッションもあれば、いきなりスティーヴ・スミスがやって来てプレイしたりハプニング続出。夜遅くまでノリにノッて続く。

Ⅳ. PASICに参加して

このPASICに行くと常に感じさせられることがある。それは受講している者1人1人がはっきりとした意志を持って参加しているということ。それだけ熱心にクリニックを聞いているし、メモもテープレコーダーも持っていて、何か掴もうとしている。おそらく半数以上の参加者がマーチングドラムを勉強していると思える。ということは、考えようによっては、既にルーディメントの叩き方などという次元の話ではない。そんなものよりもっと新しい何かを求めているに違いない。彼らの奇抜なアイデアと行動力、発想力にはびっくりさせられるものがある。

例えばここに、ルーディメントを何とかしてドラム・セットで使いたいと思った人がいるとする。彼は考え、組み合わせ、長い間研究や練習を重ねてある日突然人前に現われる。スティーヴ・ガッドのように。ひらめき、或いは発想が（自由な状態で生まれるものでなければならない）、彼の音楽性とスタイルとの融合により新しい音、プレイ、時として楽器となって熟す。発想する物の中には、おかしなものもあるかもしれない。しかし『発想する』という事が大切なのである。受動ではなく能動になるべきだ。日本人は前者の方が割合多いのではないかという気がする。が、ひとりひとりがこの事をもう少し気にしてくれたならもっと良い音楽ができるだろうなと思いながらセント・ルイスを後にした。

(by A. Komaki, edit…M. Ishii)

去る11月19日から23日に行われた日本管打楽器コンクール打楽器部門入賞者にお集まりいただき、今後の音楽活動などをインタビューした。今回は1位に該当者が無く、2位に田辺由紀さん(東京芸術大学大学院1年)、藤本隆文さん(フリー)の両名が入賞、3位には河野玲子さん(東京コンセルヴァトアール尚実ディプロマコース1年)が入賞した。この22才の3名はとにかく明るい人たちで、入賞者によるコンサートの後のレセプションでも最後まで審査員の先生方と大騒ぎをしていたほど。インタビューの時間も約60分間あったうち半分くらいは笑いっぱなしという明るさ100%の3人だった。

INTERVIEW

第4回日本管打楽器コンクール 打楽器部門入賞者インタビュー

JPC：ごくありきたりに。何故コンクールを受ける気になったか…。

田辺：どうしてかなぁ…。この前も受けたし最初は迷ったけど、楽器や練習所が思う存分使えるのは今年だけだなって思ってもう一回やってみる気になりました。

河野：この前は受けなかったけど、次は絶対受けようって前から思ってました。コンクールの状態がどういうものか知りたかったし、コンクールは絶対に受けるものだと思ってたし。

受けてから受けて良かった、どうして受かったかってだんだんわかってきたという感じですね。自分が位置するところもわかりましたし。

藤本：賞金が目当てで（笑）っていうのはウソですが…。

取り敢えず参加料20,000円で少なくとも1回はバリオホールでソロが2曲も演奏できる。調子良くいけば3回もできちゃう。もっとうまくいけば賞金も貰えちゃうっていうのは冗談ですけど、与えられる機会があるんだからそれを利用しない手はない、と。他にこういう機会ってないでしょ？あんまり。

JPC：入賞したこと以外で終ってから「受けて良かった」っていうことは何かある？

田辺：ありきたりだけど、自分がこれからやらなくちゃならない事がはっきりわかった。それから、周りの人にすごく手伝ってもらったりして助かったんですよ。最後は皆応援してくれたし――周りの人に助けられた気がします。

楽器や練習場所が思う存分使えるのが今年だけ……、もう1回挑戦しました。―田辺さん

河野：同じような事ですけどね。コンクール前から感じていた自分に足りないものがはっきりわかったし、指摘もしてもらったし。練習した過程が自分のためになったってすごく思います。

コンクールって色んな人に聞いてもらうでしょう？その中で自分をアピールすることも大切だし、それは自分のテクニックを出すことなんだから厳しいことも言われる。

良い点、悪い点がわかったのでこれからも頑張ろうっていう気持ちになってます。

藤本：やっぱり同じように、僕の場合思わぬ習性がわかってしまったんですけど（笑）…。やっぱりあがると地が出ちゃいますし。異常事態になったら自分がどうなるかってのが良くわかりました。ズボンを上げるとか（笑）…。それをこれからいかに更生していくかが問題です。あがって普通なんだと思うようにしてます。

JPC：あがるっていえば私もものすごいあがり性でソロでもバンドの中でも手がブルブル震えちゃう。

田辺：でも私もあがりますよ。1次のマリンバの時なんか、足がブルブル震えちゃってたし…。

河野：私も2次でものすごくあがっちゃって1楽章のあと気持ちを落ち着けましたね。

田辺：私の場合、あがるっていうことがないと逆に不安ですね。何か失敗しそうな気がしちゃって。ある程度あがって緊張して、手が震えたりとかが無いと、これで良いんだろうかって思って何かやりそうになっちゃうんですよ。すごく怖いですね。

河野：演奏中のことって終ったあと覚えてる？皆どうなのか聞きたいんです。

藤本：時と場合によるけど覚えてない時もあるね。

河野：私、わりと若い時は(笑)、訳もからずあがったままガ

一っとやって終ることが結構多かったけど、最近は、あがってるんだけどどこか冷静な部分があるんです。私はその方が良いんじゃないかって思うんですけど。

田辺：それは、ある程度自信がついて余裕が出てきたってことなんじゃないかなあ…。

藤本：余裕の無かった僕は何も覚えていない(笑)。でも自分で言うのも何だけど、「トルス」をやった時ははっきり覚えてるよ。あの曲個人的に好きでよくさらってたからね。

田辺：さらってある曲ってそうだよね。

藤本：それから僕が嬉しいのは、後輩が結構助けてくれたことです。皆、油かけたり火つけたりで盛り上げてくれて。よーしやるゾッて気になりますもんね。

田辺：セッティングをね、とっても細いところまでしっかり覚えてくれてる子がいて、気が楽だったっていうか。打楽器ってセッティングのことまですごく気を使わなくちゃならないでしょう。

JPC：演奏中にセッティングの不備で全てダメになっちゃったりしたらたまらないものね。——最後に、将来皆が目指していくものは？

田辺：音楽ってわりと人柄が出るでしょう？私わりと縮こまっちゃう方だから、もっと大きい音楽をやりたいですね。パワーもつけなくちゃと思うし。自分の音楽をもっともっと大きくして行きたい。

バリオホールで、しかもソロで2曲演奏できるなんて……、与えられた機会を利用しない手はない——**藤本さん**

音楽ってわりと人柄がでてしまうんですね……、私はもっと大きい音楽をやりたいですね—**河野さん**

河野：演奏について言えば、出したい音を出せるテクニックを身につけたい。音楽的には、打楽器で施律を聞かせたりリズムを聞かせる切り換えが難しいと思ったからそのあたりも勉強していきたいですね。

夢をいえば、やっぱり世界に通用するプレイヤーでなければならないと思うし、そういう希望は常に持っています。

藤本：僕は落ち着いて演奏できるようにしなくてはと。だいたい日常生活が落ち着かない人間だからこれがかなり演奏に影響してるっていうのを今回改めて知ってしまったわけで。落ち着いて腰を据えてプレイできるようにしたいなと。生活も全部変えたいですね。日頃「どひゃ～っ」とかやっててそれが演奏に出てしまうというのはちょっと良くないのではないかと…。

田辺：でも「どひゃ～っ」(笑)っていうのは演奏に出ても良いと思うけど。

藤本：そう。「どひゃ～っ」と違った部分を開拓していきたいですね。僕、とにかく腰が浮いちゃって息も出来なくなっちゃうんですよね(笑)。まず落ち着いた部分をしっかりさせないと先に進めないですからね。音楽性にも影響あるし。

支えがないと何やるにもヤバイんじゃないかと思うわけですよ。早急にはできないから時間をかけてコンスタントにやらなくちゃと思います。田辺さんのように大きな音楽にも憧れるし…。

JPC：皆さんそれぞれの希望を叶えるために自己を磨いて下さい。有難うございました。 (by M. Ishii)

吉例！ 年に一度の決算バーゲンセール!!

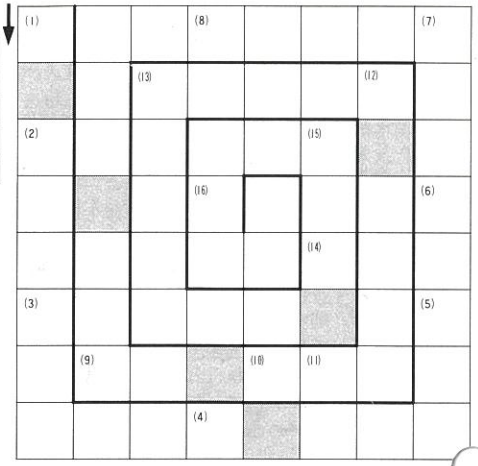
1988年1月3日(日)
↓
1月31日(日)

お待たせしました！吉例コマキの
決算バーゲンセール!!とにかく一度来てください!!
※1月3日～4日の営業時間にご注意ください。

恒例！お年玉ビッグプレゼント

し・り・と・り・Qクイズ

例
(1)タイ
(2)コマキ



☆解き方

あいているマス目に矢印の方向に従ってシリトリをしながら解いてください。渦巻状になっていますから最後は真中で終ります。完成したら灰色のマス目の６文字を組み合わせるとある楽器の名前になります。これを答えとしてハガキに書いて送ってください。

☆応募のきまり

官制ハガキに解答、住所、氏名、年齢、電話番号、JPCNo.を明記のうえ、〒111 台東区西浅草１－７－１　コマキビル６Ｆ「お年玉クイズ」係宛お送りください。正解者の中から抽選で素適な賞品を差し上げます。

☆しめきりと当選者発表

・しめきり＝昭和63年２月10日(水)必着
・当選者発表＝JPC会報No.39号誌上

☆賞品☆

〈特別賞〉	大好評！PTSスネア・ドラム時計	（１名）
〈Ａ賞〉	ＫＭＫチャイナシンバル(18″)	（１名）
〈Ｂ賞〉	ＪＰＣティンパニマレットセット	（２名）
〈Ｃ賞〉	ジルジャン・オリジナルトレーナー	（３名）
〈Ｄ賞〉	ＪＰＣタンバリン(10″)	（５名）
〈Ｅ賞〉	特製ソナーＴシャツ	（５名）
〈Ｆ賞〉	ドラムシティ・オリジナルスティック	（５名）
〈Ｇ賞〉	オリジナル・テレフォンカード	（10名）

〈ヒント〉

(1)村上春樹　著
「○○○をめぐる冒険」
(2)ＳとＮがある、鉄にくっつく
(3)トリオ、カルテット、○○○○○○
(4)三角の楽器
(5)スターウォーズの主人公レイア姫と○○○
(6)サンバで使う皮の中心に棒が付いている楽器
(7)星座の名前、フュージョンのバンドの名前にも。
(8)サンタのそりを引く動物の歌
(9)アウトドアの反対
(10)○○があったら入りたい
(11)『坊っちゃん』の著者
(12)三島由紀夫の小説で有名な寺
(13)スターウォーズ、未知との遭遇等のテーマ音楽の作曲者
(14)絵入りの解説
(15)空から降ってきた石
(16)熱で空を飛ぶ袋

(by K.Kawashima)

◀JPCだより▶

●10月15日～18日に開催された1987楽器フェア。今年は例年の会場である科学技術館の他にホテルグランドパレスも会場として、ドイツ楽器フェア、フランス楽器フェアも同時に開催。今年も前回に劣らず大盛況で、九段下界隈は楽器メーカーのカタログを詰め込んだ紙袋を持った若い人たちで賑わっていた。コマキ楽器もソナー・ブースとコマキ・ブースの２ヵ所に出展した。

●コマキ楽器では、楽器フェアに合わせて、プレミア、ソナー、輸入パーカッションの国内版カタログ及び価格表を作成しました。ご希望の方にはお送りしますのでジャパン・パーカッション・センターまで送料240円を添えてお申し込みください。

●スイスロマンド管弦楽団がKMKドラを購入！

10月末から11月初めにかけて来日していたスイスロマンド管弦楽団がKMKのドラを購入しました。「やっぱり中国製の方が素晴しい響きだネ。」とはメンバー全員のお言葉。ウィーン・フィルに続きKMKのドラを使用している２団体目の外国オケ誕生です！

●年始営業のお知らせ

１月１日～２日	年始休業させていただきます。
１月３日～31日	決算バーゲンセール
１月３日～４日	12：00～6：00まで営業いたします。
１月５日～	平常通り営業いたします。
２月１日～２日	棚卸のため休業させていただきます。
２月23日～24日	定休日のため休業させていただきます。

編集後記

皆さん！明けましておめでとうございます！

昨年１年間を振り返ってみて、何か良いことありました？私は――小さいことばかりだけれど、志賀にスキーしに行ったとか箱根の温泉に行ったとか、サンバチーム再結成したとか、パシフィックホテルに半額で泊まれたとか…引越しもしたっけな。う～ん、やっぱりスティーヴ・スミスの来日がショッキングだったといえるでしょうか。〝上手い！〟とか〝凄い〟とか〝カッコイイ〟とかそういった形容詞をつけてはならないような、そんな印象の人でした。真剣で純粋で冷静で。ジョーク好きで…。ジョークといえば、トム・コスターとスティーヴ・スミスが日本で大受けした言葉があります。それは何かというと私達日本人が彼らを呼ぶ発音。スティーヴは、スミス（Smith）のthの発音（そら出た！）を日本人ができなくて[smis]となってしまうのが面白いらしくわざとthのところを強調して「スミットゥ」と言っては笑います。トム・コスターは、コスター（coster）のerの発音（う～ん、スルドイ！）を日本人がしないので「コスタ」と聞こえると言って笑います。「Ladies and Gentlemen すてぃーぶ・すみっとう and とむ・こすた！（ゲラゲラゲラ！）」っていう具合に。始め私達日本人は何が可笑しいのかわからなかったので、後で聞いてみたらそういう訳だった。〝すみっとう〟は彼らにはバカウケでしたね。

是非またクリニックをやってもらいたいし、今度は国内で何ヶ所かまわってもらいたいですネ。

さ――て年も明けたことだし、年末から雪には恵まれてるし、バーゲンが落ち着いたらスキーに行こう。ところで、恥かしい話ですが、私スキー歴は「長い」といえるくらいになったのに、どうしてもパラレルの壁を破れないんですよ。30才でスキー始めて40才でインストラクターやってる親戚のニイチャン、というよりオジサンは、「おまえは才能が無いんだからやめなさい」と悲愴なことを平気な顔して言いますが、誰か良い方法あったら教えてくださいなっ。私は真剣ですっっっ！

……では、良いお年を。

―Ｍ―

表紙
スティーヴ・スミス

昭和63年1月1日発行
発行所　Ｊ・Ｐ・Ｃ事務局
〒一一一　東京都台東区西浅草一―七―一
郵便振替口座　東京九―一五三一一五
電話〇三―八四五―三〇四一（代）
加入者（株）コマキ楽器